

路上

梶井基次郎

青空文庫

自分がその道を見つけたのは卯の花の咲く時分であった。

Eの停留所からでも帰ることができる。しかもM停留所からの距離とさして違わないという発見は大層自分を喜ばせた。変化を喜ぶ心と、も一つは友人の許へ行くのにMからだと大変大廻りになる電車が、Eからだと比較にならないほど近かったからだ。ある日の帰途気まぐれに自分はEで電車を降り、あらましの見当と思う方角へ歩いて見た。しばらく歩いていくうちに、なんだか知っているような道へ出て来たわいと思った。気がついてみると、それはいつも自分がMの停留所へ歩いてゆく道へつながって行くところなのであった。小心翼翼と言ったようなその瞬間までの自分の歩き振りが非道く滑稽に思えた。そして自分は三度に二度というふうはその道を通るようになった。

Mも終点であったがこのEも終点であった。Eから乗るとTで乗換えをする。そのTへゆくまでがMからだどEからの二倍も三倍もの時間がかかるのであった。電車はEとTとの間を単線で往復している。閑な線のどかで、発車するまでの間を、車掌がその辺の子供と巫山ふざ戯けていたり、ポールの向きを変えるのに子供達が引張らせてもらったりなどしている。事故などは少いでしょうと訊くと、いやこれで案外多いのです。往來を走っているのは割合

い少いものですが、など車掌は言っていた。汽車のように枕木の上にレールが並べてあって、踏切などをつけた、電車だけの道なのであった。

窓からは線路に沿った家々の内部なかが見えた。破屋あばらやというのではないが、とりわけて見ようというような立派な家では勿論もちろんなかった。しかし人の家の内部というものにはなにか心惹ひかれる風情ふぜいといったようなものが感じられる。窓から外を眺め勝ちな自分は、ある日その沿道に二本のうつきを見つけた。

自分は中学の時使った粗末な検索表と首つ引で、その時分家の近くの原っぱや雑木林へ卯うの花を捜しに行っていた。白い花の傍へ行つては検索表と照し合せて見る。箱根うつき、梅花うつき——似たようなものはあつてもなかなか本物には打ぶつからなかった。それがあつる日とうとう見つかつた。一度見つかつたとなるとあとからあとからと眼についた。そして花としての印象はむしろ平凡であつた。——しかしその沿道で見た二本のうつきには、やはり、風情と言つたものが感ぜられた。

ある日曜、訪ねて来た友人と市中へ出るののでいつもの阪さかを登つた。

「ここを登りつめた空地ね、あすこから富士がよく見えたんだよ」と自分は言つた。

富士がよく見えたのも立春までであった。午前は雪に被われ陽に輝いた姿が丹沢山の上に見えていた。夕方になって陽がかなたへ傾くと、富士も丹沢山も一樣の影絵を、茜あかねの空に写すのであった。

——吾われわれ々は「扇あふぎを倒にした形」だとか「摺鉢すりばちを伏せたような形」だとかあまり富士の形ばかりを見過ぎていて。あの広い裾野を持ち、あの高さを持った富士の容積、高まりが想像でき、その実感が持てるようになったら、どうだろう——そんなことを念じながら日に何度も富士を見たがった、冬の頃の自分の、自然に対して持った情熱の激しさを、今は振り返るような気持であった。

（春先からの徴候が非道ひどくなり、自分はこの頃病的に不活潑な気持を持てあましていたのだった。）

「あの辺が競馬場だ。家はこの方角だ」

自分は友人と肩を並べて、起伏した丘や、その間に頭を出している赤い屋根や、眼に立つてもくもくして来た緑の群落のパノラマに向き合っていた。

「ここからあつちへ廻つてこの方向だ」と自分はEの停留所の方を指して言った。

「じゃあの崖がけを登つて行つて見ないか」

「行けそうだな」

自分達はそこからまた一段上の丘へ向かった。草の間に細く赤土が踏みならされてあつて、道路では勿論なかった。そこを登つて行つた。木立には遮さえぎられてはいるが先ほどの処ところよりはもう少し高い眺望があつた。先ほどの処ところの地続きは平にならされてテニスコートになつている。軟球を打ち合つている人があつた。——路らしい路ではなかつたがやはり近道だつた。

「遠そうだね」

「あそこに木がこんもり茂つているだろう。あの裏に隠れているんだ」

停留所はほとんど近くへ出る間際まで隠されていて見えなかつた。またその辺りの地勢や人家の工合では、その近くに電車の終点があるうなどとはちよつと思えなくもあつた。どこかほんとうの田舎じみた道の感じであつた。

——自分は大変なところを歩いているようだ。どこか他国を歩いている感じだ。——街を歩いていて不図ふとそんな気持ちに捕らえられることがある。これからいつもの市中へ出てゆく

自分だとは、ちよつと思えないような気持を、自分はかなりその道に馴なれたあとまでも、またしても味わうのであった。

閑散な停留所。家々の内部の隙見える沿道。電車のなかで自分は友人に、

「旅情を感じないか」と言つて見た。穀斗科かくとこの花や青葉の匂いに満された密度の濃い空気が、しばらく自分達を包んだ。——その日から自分はまた、その日の獲物だった崖からの近道を通うようになった。

それはある雨あがりの日のことであつた。午後で、自分は学校の帰途であつた。

いつもの道から崖の近道へ這入はいつた自分は、雨あがりでの赤土が軟やわらかくなつていることに気がついた。人の足跡もついていないようなその路は歩きたび少しずつ滑つた。

高い方の見晴らしへ出た。それからが傾斜である。自分は少し危いぞと思つた。

傾斜についている路はもう一層軟かであつた。しかし自分は引返そうとも、立留つて考えようともしなかつた。危ぶみながら下りてゆく。一と足下りかけた瞬間から、既に、自分はずつと滑つて転ぶころぶにちがいないと思つた。——途端自分は足を滑らした。片手を泥についてしまった。しかしまだ本気にはなつていなかった。起きあがろうとすると、力を入

れた足がまたずるずる滑って行つた。今度は片^{ひじ}脇をつき、尻餅をつき、背中まで地面につけて、やっとその姿勢で身体は止つた。止つた所はもう一つの傾斜へ続く、ちよつと階段の踊り場のような所であつた。自分は靴^{かばん}を持った片手を、靴^{かばん}のまま泥について恐る恐る立ち上つた。——いつの間にか本氣になつていた。

誰かがどこかで見ていやしなかつたかと、自分は眼の下の人家の方を見た。それらの人家から見れば、自分は高みの舞台上で一人滑稽な芸当を一生懸命やっているように見えるにちがひなかつた。——誰も見ていながつた。変な氣持であつた。

自分の立ち上つたところはやや安全であつた。しかし自分はまだ引返そうともしなかつたし、立留つて考えてみようともしなかつた。泥に塗^{まみ}れたままた危い一步を踏み出そうとした。とつさの思いつきで、今度はスキーのようにして滑り下りてみようと思つた。身体の重心さえ失わなかつたら滑り切れるだろうと思つた。鋏^{びょう}の打つてない靴の底はずるずる赤土の上を滑りはじめた。二間余りの間である。しかしその二間余りが尽きてしまつた所は高い石崖の鼻であつた。その下がテニスコートの平地になつている。崖は二間、それくらいであつた。もし止まる余裕がなかつたら惰力で自分は石垣から飛び下りなければならなかつた。しかし飛び下りるあたりに石があるか、材木があるか、それはその石垣の出

つ鼻まで行かねば知ることができなかつた。非常な速さでその危険が頭に映じた。

石垣の鼻のザラザラした肌で靴は自然に止つた。それはなにかが止めてくれたという感じであつた。全く自力を施す術はどこにもなかつた。いくら危険を感じていても、滑るに任せ止まるに任せる外はなかつたのだつた。

飛び下りる心構えをしていた脛はその緊張を弛めた。石垣の下にはコートのローラーが転がされてあつた。自分はきよとんとした。

どこかで見ていた人はなかつたかと、また自分は見廻して見た。垂れ下つた曇空の下に大きな邸の屋根が並んでいた。しかし廓寥として人影はなかつた。あつけない気がした。嘲笑つていてもいい、誰かが自分の今為たことを見ていてくれたらと思つた。一瞬間前の鋭い心構えが悲しいものに思い返せるのであつた。

どうして引返そうとはしなかつたのか。魅せられたように滑つて来た自分が恐ろしかつた。——破滅というものの一つの姿を見たような気がした。なるほどこんなにして滑つて来るのだと思つた。

下に降り立って、草の葉で手や洋服の泥を落しながら、自分は自分がひとりでに亢奮しているのを感じた。

滑ったという今の出来事がなにか夢の中の出来事だったような気がした。変に覚えていなかった。傾斜へ出かかるまでの自分、不意に自分を引摺り込んだ危険、そして今の自分。それはなにか均衡のとれない不自然な連鎖であった。そんなことは起りはしなかったと否定するものがあれば自分も信じてしまいそうな気がした。

自分、自分の意識というもの、そして世界というものが、焦点を外れて泳ぎ出して行くような気持に自分は捕らえられた。笑っていてもかまわない。誰か見てはいなかったかしらと二度目にあたりを見廻したときの廓寥かくりようとした淋しさを自分は思い出した。

帰途、書かないではいられないと、自分は何故か深く思った。それが、滑ったことを書かねばいられないという気持か、小説を書くことによつてこの自己を語らないではいられないという気持か、自分には判然はつきりしなかった。おそらくはその両方を思っていたのだった。

帰って鞆かばんを開けて見たら、どこから入ったのか、入りそうにも思えない泥の固りが一つ入っていて、本を汚していた。

青空文庫情報

底本：「檸檬・ある心の風景 他二十編」旺文社文庫、旺文社

1972（昭和47）年12月10日初版発行

1974（昭和49）年第4刷発行

初出：「青空」青空社

1925（大正14）年10月号

※編集部による傍注は省略しました。

入力：j.utiyaana

校正：野口英司

1998年9月16日公開

2016年7月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

路上

梶井基次郎

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>